

昼下がりのビーチのファイター

友人から聞いた、あるビーチでの経験談だ。

友人は海保の職員で、ふだんから嫌というほど海を見ているので、本当はビーチなんかに行きたくなかったそう。

が、職業柄鍛えられあげた肉体なら「女の子を次から次に釣れる！ ナンパに協力してくれ！」と付き合いの長い奴に拝み倒されて、一週間分の飯を驕るのと引き換えに休日、ビーチに足を運んだ。

そうして折角重い足を向けたのに、なんと、相手は彼女を連れてきて

いた。

曰く、前日に知り合って一気にカレカノの関係になったらしい。

そうならそうで、事前に連絡してほしかったところだが、相手は「ナ
ンパは禁句だ」と目で訴えつつ「俺のダチは海保の人間なんだぜ！」
と言つて、どうやら彼女に自慢をしたかつたよう。

それでいて、いざ脱いだらその筋肉美に彼女が見惚れるのではないか
と、おそらく心配して、「お前の彼女遅いなあ。待つてらんないから、
先行っているぜ」とそそくさと去っていったとのこと。

怒る暇もなく、呆けていた友人は、どうせ乗り気でなかったので帰ろ
うかと思つたものの、実は好奇心がないでもなかつた。

鍛えた肉体をビーチで見せれば、女の子を次から次に釣れるというのは本当なのか、確かめたくなくなったのだ。

そこで、友人はすでに海パンを履いていたものの、上はTシャツを着たまま、ビーチの中央辺りまで歩いていった。

360度多くの人に囲まれている状態で、連れと彼女の姿がないのを確認してから、Tシャツを脱いでみせた。

まあ、かといって、ストリップではないのだから、一斉に視線が向けられるとか、「おお」とどよめきが起こるでもなかった。

すこし、そうなることを期待していた友人は「現実はこのまんどうう」と別に変わり映えのない周りを見渡して、早々にその場を去ろう

とした。

踵を返しかけて、肩を叩かれた。

「嘘だろ」と思いつつ振り返れば、アロハシャツに短パンの髭面にサングラスをかけた小太りの中年男性が立っていた。

とたんに気分が落ちこんだものの、「君、アダルトビデオに出てみない？一万円出すから」と言われて、耳を疑ったという。

正直、興味が傾きかけたとはいえ、相手は髭面にサングラスと胡散臭さ満点な風貌だし、ビーチの真ん中で堂々と声をかけるのが、かえって怪しく思えた。

なので、「いや、俺は」と断ろうとしたのを「こんなところでスカウト？
って思うかもしれないけどね」と小太りの親父は愛想よく語りかけて
きた。

「職業柄の体ってやっぱり違うなあと思うよ。」

消防士とか大工さんとか、ほればれする体をしているんだけど、まさ
か、消防署や建築現場に行つてスカウトするわけにはいかないでし
よ？

だからビーチで見かけたら、逃す手はないというわけ」

疑いを捨てさせるような、説得力のある説明ではなかつたけど、髭面
の親父が業界の人間とは思えないほど気さくなことと「消防士」「大工」
の言葉で、友人は心が動かされた。

とはいっても、海保の職員ともなれば公務員。

バイトが禁止だという以前に、海保のイメージを汚すような行為をしてはならない。

ということ、あらためて断ろうとしたところで、友人のそんな胸中を読んだように「実際に消防士の人で撮ったものを見せようか？」と髭面の親父はスマホを向けてきた。

断るにしろ、動画を見てからでもいいだろうと、スマホを覗きこむと、なるほど海保の連中に劣らないガチムチ野郎が、鍛え上げた肉体を見せつけるように腰を突き上げている。

にしたって、消防士がこんな、ばれたらやばいことを平気でするのかと、友人は同じ公務員として信じられなかったらしいものの、動画の

顔はぼやかしてあつて、口元しか見えない状態だった。

顔の加工に気づいた友人の心中を、まともや見透かしたように小太りの親父は「きちんと映像は処理をするから。だから、消防署にばれたことはないんだよ」と言ってきた。

大分心が揺れ動きつつ、映像の処理について半信半疑だった友人に、「迷うのは分かるよ」と髭面の親父は無理に誘うようなことをせずに、最後にはこう言った。

「消防士がアダルトビデオに出ていたなんて分かったら、大騒ぎになる。」

でも君、そんなニュースや噂を実際に聞いたことがあるかい？」

